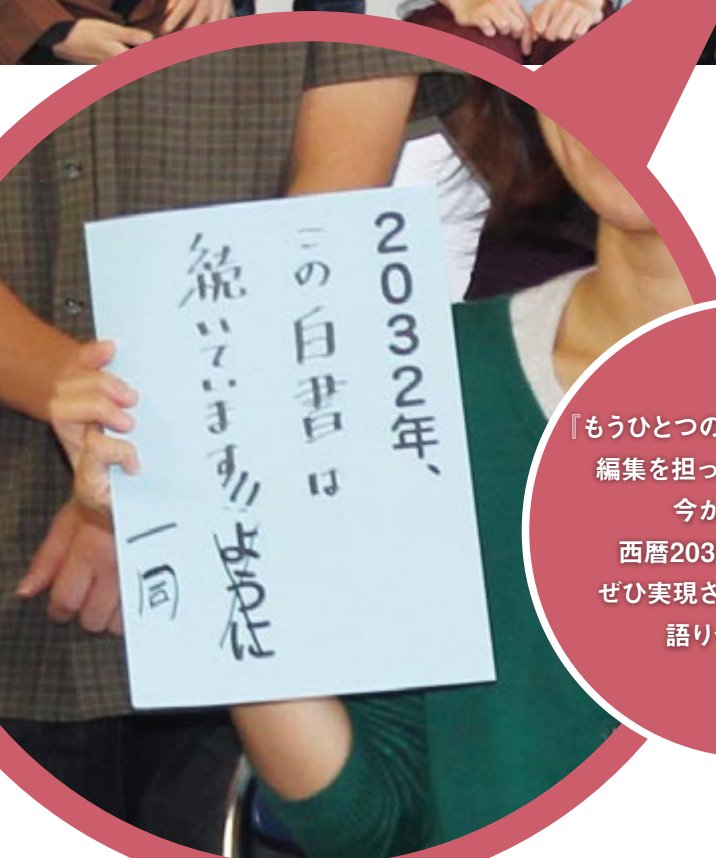
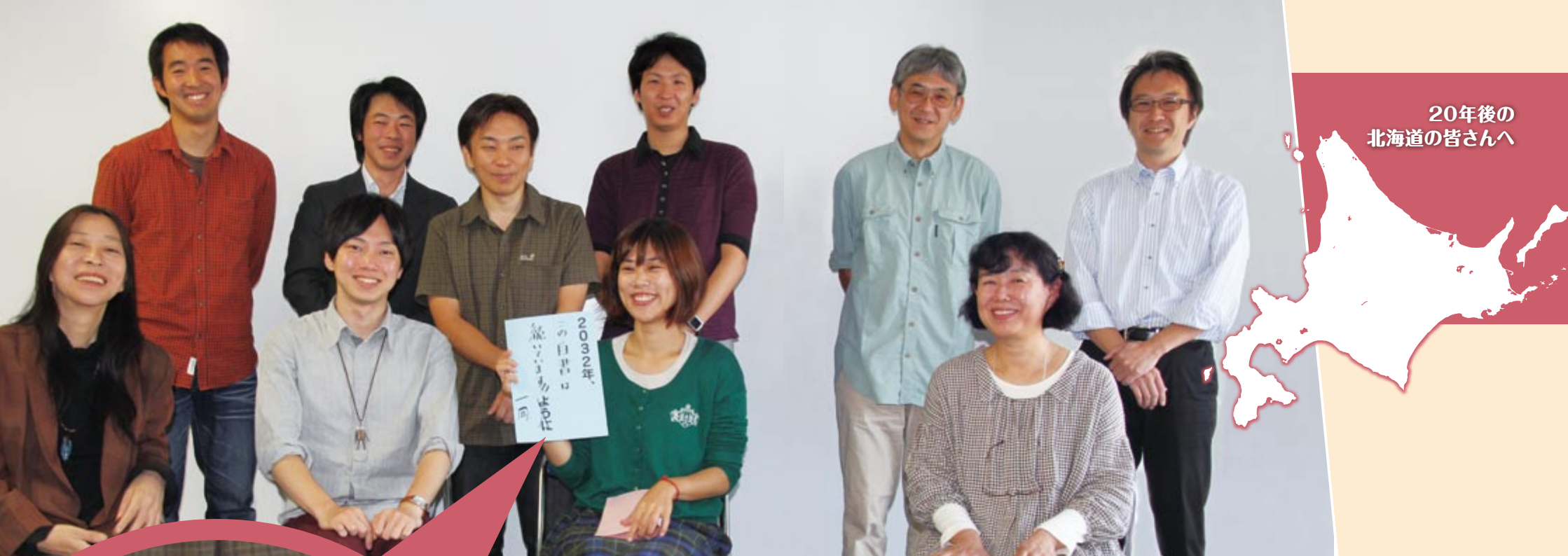


20年後の
北海道の皆さんへ



『もうひとつの北海道環境白書』の編集を担ったスタッフたちが、今から20年後、西暦2032年の北海道で、ぜひ実現させたいと願う夢を語り合いました。

溝淵 じゃあほくから。「2032年、環境保護と開発の調整者が道内に200人くらいいるように」。今はこんなに人数はいません。まあ将来、北海道の人口が減っていたら、200人も必要ないかも知れませんが(笑)。専従でなくてもいいんです、行政職員でも、中間支援団体でも。中立的な視点で、両者の調整に入れるコーディネーターがこれぐらいいる世の中になってほしいですね。

本多 ほくは「2032年、北でも南でもたくさん珊瑚が見えますように」。この前、沖縄の海できれいなサンゴを見てきたところなのでサンゴつながりで(笑)。

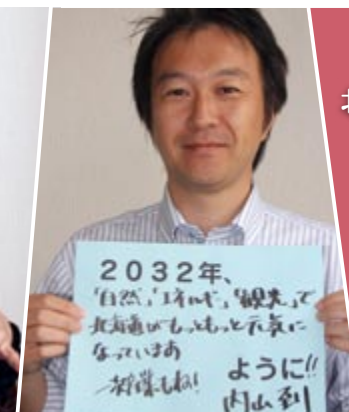
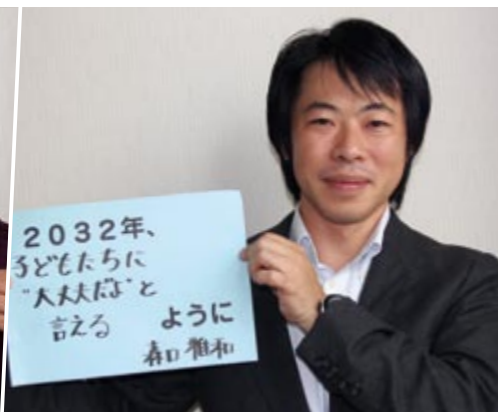
北海道でも能取湖(網走市)のサンゴ草(アッケシソウ)が有名ですよ。いま生育が芳しくないと聞いたので、保護意識が高まっていたらいいな。

久保田 温暖化による白化が心配されるサンゴとともに、北海道のサンゴ草も生物多様性の象徴ですね。

森口 ほくは「2032年、子どもたちに“大丈夫だよ”と言えるように」。

一同 おおーっ(笑)。

森口 今年、円山動物園で行われたアースデイイベントに出展した子どもたちのお話です。「100年後の地球環境はどうなっていると思いますか?」という



溝渕清彦

環境省

北海道環境パートナーシップオフィス

本多悠葵

環境省

北海道環境パートナーシップオフィス

森口雅和

札幌市環境プラザ

(指定管理者:財団法人札幌市青少年女性活動協会)

宮本 尚

認定NPO法人

北海道市民環境ネットワーク

内山 到

公益財団法人

北海道環境財団

アンケートをお客さんたちにとったんですが、①人も生き物も暮らしやすくなっている、②少し暮らしやすくなっている、③変わらない、④暮らしづらくなっている、4つから答えを選んでもらったら、④が一番多くて42%でした。

有坂 悲しい……。

森口 でも④を選んだのは大半が大人で、子どもたちは圧倒的に①か②だったんです。つまり、大人が閉塞感を持っていて、子どもたちに「大丈夫だよ」って伝える気持ちになれないでいるんですよね。20年後、そこが切り替わっていたらいいなあって思います。

宮本 わたしは「2032年、すべての『いのち』が安らかでありますように」。ヒグマとか、ヒト以外の生き物の「いのち」も含

みます、もちろん。わたしのずっと以前の基本の考え方なんですけど。あらゆる生き物がそれぞれのストーリーを持って生きられる環境っていうのかな。とくに3・11以降、「いのち」をおびやかさないエネルギーは何かを、あらためて考えました。多様な生を尊重する、それが社会の合意となって、2032年にはさまざまな選択の中で最優先の基準になってほしい、と思います。

内山 ほくは「2032年、『自然』『エネルギー』『観光』で北海道がもっともっと元気になっています(一次産業もね!)ように」と書きました。先日、風蓮湖(別海町など)でシジミ資源調査の船に同乗する機会がありました。地元の60代、50代の人たちは子ども時代、遠浅の渚を歩いた

ら砂利を踏んでいるのかと思うほど貝がいたそうですが、今は大量の泥が堆積してすっかり生息環境が失われています。水上から見てもひどい状態なんです。戦後、国が進めたパイロットファーム事業で水源の森が農地に変えられて、表土が絶えず湖に流れ込むようになったせいです。酪農家と漁業組合の人たちが協力して10年以上かけて植林を進めていますが、なかなか効果は上がっていません。

有坂 さっき森口さんが「大人が閉塞感を持っている」って話をされましたけど、そういう現実を知れば知るほど「解決はムリ」って思えてきますよね。

内山 壊すのは簡単だけど復活するのはその何十倍何百倍のお金や時間がかかる。現場を見ると分かりますよ。『白書』

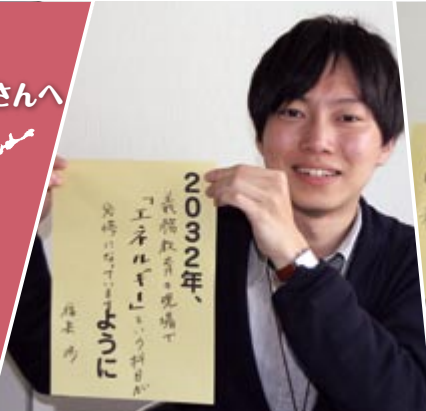
でインタビューした皆さんも口をそろえて「現場を見なさい」とおっしゃってましたよね。でもぼくらはこれから、これまでの世代が引き起こした環境破壊の復元にもっと本腰を入れていかないと。

久保田 わたしは「2032年、『環境』『自然』で外貨を稼ぐ北海道になりますように」。たとえばいま道内でメガソーラー計画がたくさんありますが、事業主体はほとんど道外の大企業でしょ。農業や水産業も同じですが、せっかくポテンシャル(潜在力)が高いのに、地元にもお金が回っていない。

宮本 地方自治体の「町づくりプラン」とかを請け負うのも、もっぱら東京の大手コンサルだったり。

久保田 地元でお金を回して持続的に自

20年後の 北海道の皆さんへ



福岳 渉
北海道大学大学院環境科学院
環境起学専攻修士課程



久保田学
公益財団法人
北海道環境財団



有坂美紀
環境省
北海道環境パートナーシップオフィス



吉村暢彦
北海道大学大学院
地球環境科学院



岡崎朱実
札幌市
環境プラザ相談員

然環境を守る。20年後にそれを実現できていたら、北海道は日本で一番豊かな地域になりますよ。

福岳 「2032年、義務教育の現場で『エネルギー』という科目が必修になっていますように」が僕の願いです。小中学校で「英数国」が「エネ数国」ってなってるイメージで。

一同 (笑)

福岳 エネルギーはあらゆる人間活動の基盤なのに、自分たちが何にも知らないということを今回の原発事故で痛感しました。

岡崎 これまでエネルギー教育といったら「原発は安全」の“教育”ばかりでしたもんね。

福岳 そうなんです。だからせめて、ど

の家電を止めたらざっと何ワット節電できるとか、金銭感覚と同じ水準まで基礎知識を底上げしていきたい。そのうえで、専門家まかせでなく、未来のエネルギー政策をふつうの市民同士が議論できるような社会になって欲しいと思います。

吉村 ぼくは「2032年、『自然を守る』『再生する』が公共事業のメインになりますように」。北海道の財産はなんといっても自然です。雇用の面などで公共事業は大事だとは思いますが、自然を壊す公共事業は、大事な財産を捨てている状態だと思います。それを、大きく方向転換して、自然を守ること、再生することに投資をして、自然という財産を増やしていけるようになればいいですね。食や観光の面では、久保田さんのいう「外貨獲得」の

基盤を強くすることだと思います。2000年代に釧路やサロベツ、知床などで自然再生事業の流れが生まれたのに、いますっかり下火になってしまっています。それを呼び戻したいですね。

有坂 わたしは「2032年、生物多様性保全といえば“北海道”と言われるように」。北海道がとても好きです。それは、世界的に見ても、北海道には非常に豊かな自然が残っていると思うからです。この生物多様性を守る姿勢を明確に打ち出せば、きっと世界を先導していけるはず。それを学びに各国からたくさん視察の人たちが来てくれるような(笑)。自然エネルギーとか、環境に関連することすべてにおいて、北海道が世界を一番リードできると本気で思っています。

岡崎 最後はわたしですね。「2032年、市民が考え、選択できる社会になっていきますように」。市民活動を始めたきっかけもこれでした。自分で選びたいし、行政が決めるんじゃないで、一緒に決めたい。
久保田 市民が「白書」を作る意味もまさにそこにあると思います。行政機関はあくまで所管する範囲内のことしかできません。それを統合補完するのは外部、つまり市民です。
岡崎 選ぶための情報が当たり前で共有されていく。この「白書」のような取り組みが続いたらきっと実現しますね。

(2012年10月5日)